



今、何秒で

濡れた？

R18

全部、数えて暴いてやる

第一話

敵地の砂時計

水の音で目が覚めた。

知らない天井だった。低い木の梁が渡してある。畳の匂いがした。

七海は身を起こした。頭の芯が重い。

(ここ、どこ)

薄暗い。障子の向こうがぼんやり白い。雨の匂いがした。湿った空気が肌にまとわりついてくる。指先がふやけたみたいだった。

体の節々が重い。潜ったあとの鉛みたいな疲れだ。でも装備はどこにもない。着ているのは潜水インナーだけ。誰かが上着を脱がせたらしい。素肌にいぐさがちくちく触れた。

棚では古い時計がいくつも時を刻んでいる。ぜんまい式。振り子。水時計。どれも少しずつ違う速さで動いていた。ここだけ時間の流れ方がおかしい。

その真ん中に、伏せられた砂時計が一つ。それだけが止まっていた。

「起きた」

声のほうを見た。

識が湯呑みを持って座っていた。黒いエプロン。まくった袖。細くて長い手が湯呑みの縁をなぞっている。

「……しき」

「三十時間も寝てた。潜水のあとの疲れを甘く見すぎ」

淡々と言う。責めてはいない。ただ事実をそこに置く。昔からこの幼馴染のやり方だった。

「平気。もう平気だから」

「脈がまだ速い」

識の目が七海的首筋で止まった。瞬きがない。

測られていると思った。

昔からそうだ。海に潜れば何秒潜ったか、熱を出せば何度あるか。識はいつも数えて手帳に書いた。変なやつだと思っていた。今も思っている。

子どものころ、七海はよく防波堤から飛び込んだ。識は飛び込まなかった。代わりに岸で秒を数えていた。海から上がるたび、何秒だったと教えてくれる。それが挨拶みたいなものだった。ずっと見られていたことに、七海は一度も気づかなかった。

ここは識の店だった。祖父から継いだ古い骨董屋。その奥の茶室らしい。棚には湿度計だの古い時計だのが並んでいる。畳の端に藍色の絹のスカーフが無造作に置いてあった。どこかで見た色だった。

「港で倒れたんだ。宗さんが運んできた。心配してたぞ」

心配、という言葉がうまく身に入らなかった。倒れた自覚もない。ただ次の潜水のことばかり頭に浮かぶ。

「……仕事は」

「休めってさ。試験まであと七日だろ」

その言葉で頭が冷えた。

潜水士の学科試験。現場では誰にも負けない。素潜りも送気も混合ガスも体が覚えてい
る。なのに紙の上では三度落ちた。分圧も法令も頭に入らない。受からなければ来季の
ーダーはない。潜れなくなる。海のない自分を、七海はうまく思い描けなかった。

七海は畳に手をついた。

「頼みがある」

「言ってみ」

「勉強を見て。ここ静かだし」

識が湯呑みを置いた。かたん、と乾いた音がした。

その手が棚から何かを取る。

砂時計だった。古い。硝子が少し曇っている。上の玉に白い砂が満ちていた。

「俺のやり方でいいなら」

識が砂時計を畳に伏せた。まだ落とさない。

「十五分だけ。これが落ちるまでに覚えたことを全部言えたら合格。言えなかったら」

「言えなかったら？」

「俺が確かめる。お前がほんとに集中してるか」

意味が分からなかった。ただ識の目がいつもより暗いことだけ分かった。

外で雨脚が強くなる。茶室の湿度がじわりと上がった。障子の紙がしっとり湿気を吸っている。

七海は頷いた。現場と同じだ。やると決めたらやる。

「分かった。やる」

識の指が砂時計を立てた。

さら、と白い砂が落ちはじめる。

（十五分。楽勝）

そう思ったのは、はじめのうちだけだった。

「高気圧障害。減圧症の分類を言ってみ」

識が後ろへ回った。背中に胸がつく。息が耳にかかった。畳に膝をついた七海を、彼が背後から囲う形だった。膝と膝の間はもう、拳ひとつ分もない。

「……ベンズ。チョークス。あと」

「あと？」

「……ス、ステイグル」

長い指が横から顎を捉えた。上を向かされる。曇った硝子の中で、砂がもう三分の一落ちていた。

「集中して。まだ半分もある」

声が優しい。優しいのに逃げ場がない。手が首筋を撫でおろす。潜水インナーの襟ぐりを、つ、となぞった。

「し、しき。それ勉強じゃ」

「勉強だよ。お前の脈を測ってる。今、跳ねた」

（測るって、なに）

インナーのジッパーに手がかかる。じ、と半分だけ下ろされた。腕がされはしない。乱されるだけ。晒された胸のふくらみを、手のひらが下からすくった。

手のひらは乾いていて、少しひんやりしていた。骨董を扱う手だ。その手が肌の熱を吸って、じわじわ温まっていくな。

（なんで、こんなに意識しちゃうんだろ）

「つ、ぎ。窒素酔いの」

「言いながらでいい。止めないよ、俺は」

ちゅ、と首筋に唇が落ちた。ちゅっちゅっちゅつ、と続く。七海の肩が跳ねる。

うなじに識の息がかかる。乾いた唇が首の後ろをゆっくり這った。ぞく、と鳥肌が立つ。

（耳、弱いのか、なんで知ってるのか）

「や、まって。こんなの聞いてな」

乳首をつままれた。くにゅ、と転がされる。こねこねこね、と芯を潰される。

「ひあっ!? やっ、そこは」

「ここ、勉強の邪魔? ぷっくりしてきた」

こりこりこり、と先をなぶられる。腰の奥が勝手に疼いた。太腿を擦り合わせてしま
う。

（やだ、なんで、ただの勉強なのに）

「腿、閉じてる。ばれてるよ」

もう片方の手が下りていく。インナーの股布の上から、ぐ、と押された。

「濡れてる」

事実を置かれた。それが一番恥ずかしかった。

棚の湿度計に識が目をやった。丸い硝子の中で針が右へ振れている。

「梅雨だな。今日は湿度、八十を超えてる」

「なに、いきなり」

指を割れ目からいったん離す。とろ、と糸を引いた。その指を七海の目の前にかざす。

「湿度計より、お前のほうが正直だ。ほら、八十どころじゃない」

（見せ、ないで、そんなの）

指先の蜜が、灯りにぬらりと光った。七海は顔をそむける。

「言ってみ。窒素酔いの症状。言えたら、ここはやめてやる」

布の上を指がなぞる。つ、つ、と。薄い生地が割れ目にくいこむ。ぬ、と湿った音がした。

「ちっ、酩酊、判断力の、低下っ……あうっ♡」

語尾が跳ねた。自分の声に♡が混じった。七海は口を押さえる。

（今の、なに、今の声）

「途中まで合ってる。続き」

「た、多幸感、と、判断の、あ、あ♡」

言いかけるたび、指がお豆をかすめる。頭の中の言葉が、ぷつ、ぷつ、と途切れていく。現場ではあんなに冴える頭が、まるで働かない。

（やだ、答えがとんじゃう）

「上手。でも一個抜けてる。もう一回」

「へ、減圧症の第一種、と」

指がまた、お豆をかすめた。言葉の途中で腰が跳ねる。

「第二種は？ ほら、続けて」

「む、り、しゃべれなっ」

わざと、と思った。分かってて抜けたと言っている。布越しの指が、割れ目の上のほうを探り当てた。お豆のところを、くにくに、と押す。

「あっ♡ や、そこ、ぐりぐりしないで」

「ここ？ここを勉強って呼ぶことにしよ」

くちゅくちゅくちゅ、と布ごしに擦られる。じわ、と染みが広がっていく。もう答えどころではなかった。

「すっごい濡れてんな。布、いらないな」

股布を横にずらされた。脱がさず、ずらすだけ。剥き出しになったそこへ指が直に触れる。ぬちゅ、と鳴った。

「ちが、これ、汗で」

「汗じゃない。まんこの汁だろ。ほら、糸引いてる」

（言わないで、そういうの、言わないで）

指の腹がお豆を捉えた。ぬちゅぬちゅぬちゅ、と転がされる。七海の腰が跳ねた。逃げようとする腰を、もう一方の手が押さえこむ。

「に、げ、っ」

「逃げるなよ。まだ砂、落ちてる」

硝子の中の砂は、残り少なかった。落ちきったらどうなるのか、頭のどこかで分かっていた。分かっているのに止められない。

「あ、それ以上、いっちゃう♡」

「もういくのか。早いな」

指の動きが速くなる。くにくにくに、とお豆を潰される。奥から新しい蜜が溢れて、指を濡らした。

「らめ、らめっ、砂、落ちる前に、あゝ♡♡♡」

「いいよ。落ちる前に一回、イっとけ」

その瞬間、最後の一粒が落ちた。

同時に、七海の腰がびくんと跳ねた。指の上で、達してしまった。

「あゝ♡♡♡」

さら、と音が止んだ。

茶室が静かになった。雨の音と、七海の乱れた息だけが残った。

識が砂時計をそっと横に倒した。指先で。時間を止めるみたいに。

「時間切れ。しかも、勉強より先にイったな」

「ち、ちが」

「今、何秒保った？ 自分で分かるか」

「わ、わかんない」

「潜水は秒で測れるのに、自分のいく時間は測れないのか」

（そんなの、数えてない）

「じゃあ、これからは俺が測る。よく覚えとけ」

「確かめる、って言ったろ。ここからが本番」

背中から抱き込まれた。畳に四つん這いにされる。腰だけ高く。インナーは着たまま。

ジッパーは半分。股布はずれたまま。晒されているのは、そこだけだった。

「服、脱がさないの」

「脱がさない。このほうがお前は恥ずかしがる。今、耳まで赤い」

（そういうとこ、昔から、やだ）

背後で衣擦れがした。硬いものが割れ目に当たる。ぬる、と滑った。七海の息が止まる。

「し、しき、ほんとに入れ」

「息、止めるの癖だな。潜るときと同じ。今は止めなくていい」

ぐ、と先が沈んだ。張ったちんぽの先が、狭いところを押し広げる。

「あぁっ♡」

「はい、ぜんぶ吐いて。ゆっくり」

ずぶ、ずぶぶ、と犯される。ぬぷぬぷぬぷ、と奥へ届く。まんこが限界まで広げられた。

入ってくるものが熱い。茶室の湿った空気より、ずっと。背中に貼りついた識の胸も汗ばんでいた。二人の境目が、どこか分からなくなる。

（あつい、なかが、いっぱい）

「んあ、あ、おっきい♡ なんでこんな」

「中、ぎゅうぎゅう。俺のをしゃぶってる。分かる？」

「い、言わな、で」

（嘘、こんなの知らない、身体が勝手に）

腰を引かれて、また沈められた。ずちゅずちゅずちゅ、と挟られる。奥をこつ、と叩かれた。子宮口を先で押される。目の前が白んだ。

「ここ好きだろ。押すと締まる」

「あ、あ、らめ、そこ、おなかの奥っ♡」

最初はゆっくりだった。奥までみっちり埋めて、止まる。息の整う暇もなく、また根元まで。焦らすみたいに、確かめるみたいに。

「中の形、覚えた。ここが弱いとこだな」

「おぼえ、ないで、そんなの」

（一回ごとに、暴かれてる、全部）

ずぶ、と一度深く抉られて息が詰まる。子宮口の、さらに向こうまで届こうとする。届くはずなのに、届きそうで怖い。

（そこ、だめ、しんじょう）

「大丈夫。ちゃんと測ってる。まだいける」

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡、と抜き差しが速くなる。インナーの背が汗で肌に貼りつく。曇った砂時計の硝子に、七海の崩れた顔がぼんやり映っていた。

突かれるたび、繋ぎ目からとろりと溢れた。太腿の内側を、生温かいものが伝う。畳に、ぽつ、と落ちる。湿った匂いが雨の匂いに混ざった。

（垂れてる、こんなに、うそ）

「顔、硝子に映ってる。見ろ」

「や、みたくな」

「泣きそうな顔。えっちだな、七海♡」

（見たくない、こんな顔、なのに目が離せない）

名前を呼ばれた。「なな」じゃなく「七海」と。それだけで、まんこが勝手に締まる。

「今、締まった。呼ばれるの好きなのか」

「ち、ちが」

「嘘つき。ぐしょぐしょだぞ、七海♡」

抱き起こされた。背中を胸に預ける形で、膝に乗せられる。向かい合わせの壁に、大きな硝子戸。そこに、繋がったままの二人がまるごと映った。

「見ろ。俺のが、七海の奥に入ってる」

「やっ、映さ、ないで」

この体位だと、もっと深く刺さる。自分の重みで、いちばん奥まで落ちてしまう。

「ひあ、ふか、っ、当たって」

識が空いた手を伸ばした。倒れていた砂時計を、また立てる。さら、と白い砂が落ちはじめた。

「今度はこっちの番。これが落ちきるまで、いくの我慢な」

「む、むり。そんなの」

「我慢できたら今日はここまで。できなかつたら、もう十五分」

「ずる、いつ」

「ずるくない。検証だよ。お前がどこまで保つか」

ぐ、と下から突き上げられた。奥をこじ開けられる。

「あゝっ♡ む、り、それされたら」

「保て。まだ砂、いっぱい残ってる」

（やだ、数えないで、そんなところ見ないで）

じゅぷじゅぷじゅぷ♡、と下から穿たれる。イきたいのにイってはいけない。腰を止めようとするほど、締めつけが強くなった。

「締まってきた。我慢してる証拠だ。えらいな、七海♡」

「ほ、褒めないで、余計っ」

汗が背中を伝う。茶室の湿気と繋ぎ目の熱で、肌がしっとり濡れていく。硝子戸が二人の輪郭に曇っていった。

「あ、あ、もう砂、どれくらい」

「見てみ。あと半分」

（まだ半分、うそ、保たない）

奥をぐりぐり捏ねられる。逃げ場のない波が腹の底で膨れていく。

「らゝめ、それ、いっちゃ、いっちゃう」

「あと少し。落ちきるまで、俺ので保ってろ」

最後のひとつまみの砂が、くびれを通り抜けていく。

「い、いいの、もう、いい？」

「いいよ。落ちた。よく我慢した」

ぽちゅぽちゅぽちゅ♡、と下から突き上げられる。ぐぼぐぼぐぼ♡、と重い音。晒された胸が上下に揺れる。乳首が硝子越しの自分にも見えた。

「乳首、つんつん。ぴくぴくしてんぞ」

「い、じ、めっ」

「いじめてない。ご褒美。よく頑張ったろ」

（ごほうび、ってなに、あたまとけ）

突かれるたび、繋ぎ目からぬちゃ、ぬちゃ、と音が漏れる。太腿を伝って畳に垂れた。締めつけが止まらない。

「あ、また、くる♡ とまんない」

「いいよ。何回でも。俺が数えてやる」

ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♡、と抜き差しが激しくなった。奥を続けざまに穿たれる。七海の背が反り返る。

「い、いく、いっちゃ、あゝあゝ♡♡」

「いけ。ぜんぶ見ててやる。七海♡」

子宮口を、ぐりっと押し潰された。

「んゝあゝあゝ♡♡♡」

落ちた。落ちきった。頭の中が真っ白な砂で埋まる。びく、びくびく、と腰が跳ねた。まんこがきゅうきゅう締めつける。

どびゅっ♡、と奥で弾けた。ビュルルッ♡、と続けて注がれる。熱いのが子宮口に当たった。

「あ……あ……っ♡」

とろ、と溢れた。繋がったところから、白いのがこぼれる。

識が動きを止めた。中でまだ脈打っている。

「はい、よくできました」

ゆっくり抜かれる。ずるり、と。垂れる感覚に、また腰が震えた。

七海は畳に頬をつけた。息が上がっている。潜水のあとより苦しい。

曇った硝子戸が少しずつ晴れていく。自分の吐いた息で曇って、体温が引いて晴れていく。それを識がじっと見ていた。まるで実験の結果でも記録するみたいに。

（なんで、こんな、幼馴染なのに）

識が、倒した砂時計をまた立てた。上の玉は空っぽだった。全部落ちきっている。

「なな」

呼び方が戻っていた。「七海」じゃなく「なな」に。

「……なに」

「窒素酔いの症状、結局言えなかったな」

「……うるさい」

識がふつと笑った気配がした。珍しい。この幼馴染が笑うのは。

汗ばんだ背に、彼が絹のスカーフをかけてくれた。藍色の。やっぱりどこかで見た色だった。乾いた布は、雨の湿気の中でほんのり温かい。

「これ……」

「昔、お前が置いてったやつ。ずっとここにある」

思い出せなかった。いつのことか。ただ、色だけが胸の奥をくすぐった。

識が水を汲んできた。冷たい湯呑みを手に握らせてくれる。七海は一気に飲んだ。喉がからからだった。

「……のど、渴いた」

「知ってる。三十時間寝てたからな」

淡々と、また事実を置く。でも湯呑みはちゃんと二つあった。自分のぶんも汲んである。そういうところだけ、昔から変わらない。

（気づいてなかった。喉、渴いてたの）

自分の体のことすら、この幼馴染のほうが先に分かっている。少し悔しくて、少し楽だった。

識が絹のスカーフを七海の肩まで引き上げてくれた。藍色が、日に焼けた肌によく映える。この色をどこで見たのか、まだ思い出せない。でも嫌な感じはしなかった。むしろ、ずっと前から知っている手ざわりだった。

「明日も十五分。逃げるなよ」

「逃げない。受かるまで」

現場ではいつも即答できる。潜る深さも抜ける手順も迷わない。なのにこの一言だけ、少し喉に引っかった。

言ってから、七海は自分の言葉に少しだけ動揺した。

（受かったら、ここに来なくなるのか）

考えかけて、やめた。

畳の上で砂はもう落ちない。上の玉はからっぽのまま。

試験まで、あと七日。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。